

を作ったよかったです。しかし公園の完成を一番楽しみにして下さっていた井上謙先生が黄痘で急きよ入院され、開園式にご出席できなくなりました。先生は名著『評伝・横光利一』を上梓される前、柘植にも足しげく調査にいられたようですが、我が家の跡地に残されていた井戸が『跳ね釣瓶』だったという情報提供は、私からが初めてだったというお手紙を戴きました。そして『笑はれた子』についての私の証言を認めて下さり開園式にあたって託されたお祝辞のなかで「横光文学の原風景を知る貴重な拠点がこの地に誕生した。多くの方々がこの庭に遊び、跳ね釣瓶に託した横光さんの斬新意図を偲びながら、大いなる夢を画く新しい水をどんとどんと汲んでくださることを願っております」と書いて下さいました。私は先生に、この『跳ね釣瓶』で、いの一歩に冷たい新鮮な水を汲んで戴こうと心ひそかに願っていたのですが、とうとう、それは叶わず無常の風を恨むことになってしまいました。私は大学に入るまで、昭和の文豪と呼ばれた小説家・横光利一が幼少のころ住んでいた同じ家に偶然住んでいました。その家は藁葺きの母屋の隣に菓子商を営むために祖父が明治に建

てた家でした。老朽化したので家は撤去しましたが『笑はれた子』に登場する『跳ね釣瓶』だけは利一が住んでいた当時の唯一の証拠になると思い今日まで残してきました。だから、私は当時の家敷の風景を克明に伝えることのできるラスト・ウィットネスです。そして私ができる限り子供たちに横光利一という立派な小説家が少年の頃住んでいた家のことと『跳ね釣瓶』の水の汲み方とその原理を教えてあげようと思つて鉄製で『跳ね釣瓶』を復元しました。それがご縁で、こうした立派な横光文学会会報にご紹介いただき大変光栄に存じております。なお、今年七月二十一日(日)に〈第一回はねつるべ ども会〉を催して、子供たちに水鉄砲で遊び、俳句をつくつてもらおうかと思つています。

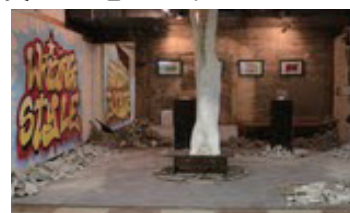
個展「REACH MODERN」と横光利一

中島晴矢

大学の文学部で日本文学を学び、自分なりに横光利一を熱心に読んだだけの私が、この場に寄稿できることに恐縮しつつも、とにかく、横光を主題とした現代アートの個展を名古屋のアジトというギャラリーで昨年行った

のだった。

なぜ横光なのか？とはよく聞かれたが、私の中の初期衝動ははっきりとひとつだ。「日本ではシュールリアリズムは地震だけで結構ですから、繁盛しません。」という文



〈個展会場の様子〉

言である。これはむろん、『厨房日記』や『歐州紀行』に描かれている、岡本太郎に随伴したパリのトリスタン・ツアラ邸で、「シュールリアリズムは日本では成功していますか。」との問いに対する、横光の答えだ。私はこの言葉に東日本大震災の直後に出会ってしまったのだ。ブラウン管から流れてくる光景を見るたびに、この言葉は強烈にフラッシュバックし、脳にこびり付いて離れなくなった。現実、シュールリアリズムよりもはるかにシュールリアルな光景が、眼前の日本に広がっていたのだから。

その年、私は学部の卒論で横光論を仕上げたのだが、担当教官のルールにより手書きで書いた原稿が、二百枚ほど手元に残った。文字がびっしりと書かれた二百枚の原稿用紙は、デッサンかドローイングと相違ない絵

画的なるものと思われた。そこで、手書きの原稿用紙をメディアウムに、横光利一（文学）論をコンセプトとした展覧会を開くことに思い至った。

たとえばメインの作品《Writing Style》は、横光論が書かれた原稿用紙をキャンバス代わりの下地とし、その上にスプレーで文字を描いた三メートル近いものだ。これは「形式主義文学論争」を中心とした横光の言語論を参照している。文字を「物体」と看做した横光の形式論を踏まえ、現代において文字の美的な《物体化》を端的に実践しているのはグラフィティだろうと当たり前に考え、その意匠を用いた。最も有名なグラフィティのひとつである「Wild Style」の字体をベースに、「Writing Style」（＝文体）と描いたのだ。

あるいは《自壊する機械》という作品は、樹脂の中に四つの歯車が入られたオブジェである。一番好きな小説『機械』を、自分な



〈自壊する機械〉

りに図式化し立体化したものだ。歯車は「私」「軽部」「屋敷」そして「分裂した私」という、作中人物をそれぞれ象徴している。言うまでもなく、当時の

「機械主義」的な歯車のメタファーの視覚化でもある。また、《春は馬車に乗つて》という、小説タイトルのままに、ダダイズムのレディメイドの手法を用いて、馬車のプラモデルと花の玩具を組み合わせた作品もある。

さらに、展示空間全体には、ガレキを運び入れ散乱させた。関東大震災のイメージだ。東日本大震災から関東大震災まで貫かれているもの。横光は崩壊した都市から文字通り新しい文学である新感覚派を立ち上げ、時代を切り開いていった。そこに僅かな希望と強烈なシンパシーを感じたがゆえの、インスタレーションだった。

こういった形で、随分身勝手に横光を解釈し、全面化して展示を行ったわけだが、結果的に微力ながら少くない人に「横光利一」という存在を認知せしめることができたのではないか、などと考えている。

（現代美術家。法政大学文学部日本文学科、美学校卒業。個展の記録映像は <http://www.youtube.com/watch?v=0Lchw7CAWDI>）

会員の近況

横光利一、中村光夫、そしてフローベール

木村友彦

この度、私の拙い文章が第五六回群像新人文学賞評論部門優秀作を受賞したが、前年度受賞作なしという状況に助けられて、かろうじて「優秀作」という称号のみをいただいたというのが現実だ。出版社による公募の文学賞は、極力受賞作を出すとという配慮に助けられたというのが率直な感想である。この拙い文章が、文芸評論と呼べるかどうかという判断は読者に委ねるとして、文章のスタイル、思考形態、内容について等、実に多くの批判をいただいている。批判が多いのは当然だし、謙虚に受け止めるべきだが、気になる見解を複数の人から提示された。それは、私も含めて近年の評論部門の受賞者の年齢が高くなり過ぎていくことが、「文芸批評の危機を象徴しているのではないか」という悲観的な内容のものである。不惑の年齢を超えた私にとって、今回の受賞はどうも明るい話題を提供してはくれないようだ。

このようなどんよりとした状況の中でも、あえて展望は持ち続けたい。横光利一や中村